

平成28年度第4回 伊那市総合教育会議会議録

- ◎招集年月日 平成29年 2月23日(木)
- ◎開催日時 平成29年 3月13日(月) 午後3時30分～4時48分
- ◎場所 伊那市役所 庁議室
- ◎出席者 白鳥市長、松田教育委員長、宮脇教育委員長職務代理者、田畑教育委員、原田教育委員
- ◎欠席者 なし
- ◎出席職員 北原教育長、大住教育次長、北野学校教育課長、小松生涯学習課長、捧文化振興課長、宮下スポーツ振興課長、中村指導主事、唐木指導主事、山崎教育総務係長

1 開 会

大住教育次長

皆さん、こんにちは。定刻となりましたので、今年度最後、第4回目の伊那市総合教育会議を始めてまいります。初めに白鳥市長からごあいさつをお願いいたします。

2 市長あいさつ

白鳥市長

こんにちは。今年度最後の会議ということでもありますけれども、この1年間、みなさんにはいろんな場面でご助言をいただいたりしてありがとうございました。この1年を振り返ってみますと、「暮らしのなかの食」、これが軌道に乗って全国からも注目されてきたというようなこと、また、伊那市としては、「50年の森林(もり)ビジョン」ということで、平成26年度から計画してきたことを実行に移す、そんな年になってまいりました。それはとりもなおさず、地域のエネルギーというものを極力自然エネルギーの方にスライドしようという試みでありまして、この地域が日本の中で注目されるであろう、そんな事業であると思います。また、ICT、IoTといった最先端の技術も学校現場にも持ち込まれ、また、先日は革新的なドローンという技術を使った実験が始まったりして、子どもたちを取り巻く環境というのは、従来より大きく飛躍をしてきていると思います。最先端の機器を使いながら、また、地元のわたしたちの伊那市のことを学びながら、伝統をきちんと懐抱しながら生きていくという時代になってきていると思います。この総合教育会議、ますます重要になろうと思っておりますので、今日も闊達なるご意見をいただければと思っております。

大住教育次長

ありがとうございました。続きまして、松田教育委員長、お願いいたします。

3 教育委員長あいさつ

松田教育委員長

3点お話をさせていただきまして、あいさつとさせていただきます。

2月の4日の日に伊那小学校の公開学習指導研究会が開催されました。この公開研

究会は今から38年前の昭和54年から絶えることなく続いてきておりまして、全国的に見ても稀有な存在の研究会であると思います。今まで延べ2万人をはるかに超える参加者がございまして、今年も遠く沖縄の地からも参加者がおりまして、大変充実した研究会になりました。伊那小学校の底力を内外に示したというふうに思っております。また、かねてから総合学習で学んだ子どもたちが、中学校に行ってもどんな学びをしているのか、参観したいというのが、伊那小参観者の願いでありましたけれど、今年度初めて、伊那小学校公開の前日、伊那中学校で公開研究会を開催していただきました。予想以上の参加者がございまして、また、小学校からの連続的な学びの姿に参観者は感銘をされておりました。

ふたつ目ですけれども、今年、創造館をはじめとして各館連携して行ってまいりました中村不折展は大変好評で、テーマを持って各館連続しての事業を作り出すという夢が実現できまして、次への道筋が示された年になったと思っております。

3つ目は、この3月19日に開催されます男子第40回、女子第33回「春の高校伊那駅伝」は年々充実し、念願でありました全国放送がされるという朗報によって、子どもたちはもとより地域の皆さんにとっても、さらなる誇りとなりまして、故郷伊那市への帰属意識を高めていく大きな働きをしていることが期待されるというふうに思っております。

まだたくさんございますけれども、3点に絞ってお話をさせていただきました。

29年度に向けまして、伊那市の教育のいよいよの充実に努めていきたいとの願ってのあいさつとさせていただきます。

大住教育次長

それでは、協議事項に入ります。白鳥市長の進行でお願いいたします。

4 協議事項

(1) 伊那市学校給食食農体験事業「暮らしのなかの食」の更なる充実に向けて

白鳥市長

それでは、今日5時までということですので、進めさせてもらいたいと思います。最初に、協議事項の(1)伊那市学校給食食農体験事業「暮らしのなかの食」の更なる充実に向けてということをお願いしたいと思います。

松田教育委員長

資料ナンバー1を見ていただきたいと思います。

学校給食あり方懇談会の提言では、「子どもたちが暮らしのなかの食を核として伊那谷の自然とくらしの循環を毎日の学校・保育園で実感して学ぶ」という、新しい一つの教育を拓くことを期待をされております。

この期待の具体の姿は、子どもたちから失われている、あるいは失われつつある食の原体験であるところの、土を耕す、種を蒔く、心配りをしながら育てる、そして収穫をする活動が、子どもたちの生活の中に回復されてくる。このことによって食育の原点と言われる、命をいただくとか、もったいないとか、あるいは感謝する、そういう感情が育まれてくると同時に、自分たちの故郷への愛着、あるいは帰属意識が育まれてくることを願ったものであります。

この新しい教育を拓く活動が、地域の皆さんに理解していただく、あるいは先生方

や子どもたちによく理解していただける、そういうことを願って当代一流の哲学者である内山節先生を指導者にお願いをしまして、今年で2年目ですけれど、先生のご指導を元にして、次年度につなげていくにはどうしたらよいかということで、ご提案をさせていただきますので、お聴き取りをお願いしたいと思います。

まず、最初に1年目、27年11月4日に『創造的教育と学校農園—作ることを学ぶ、風土を学ぶ—』ということで、先生のご指導がありました。大きく3点、「学校とは何かといえば、学校という場をみんなで創っていく場所のはずなんです。子どもたちの生きる場を作っていくということです。」というご指導ですけれども、このことは、伊那市の教育理念と正に重なってくると思います。「給食の食材を生産する」というところに軸足を置きつつ、教師が与える、安易な生産活動でなく、「子どもの求めや願い」による生産活動になっているのか、この問いを発するべきだと思います。子どもと教師の願いの練り上げ、活動の成立の重要性ですけれど、このことがないと、生きる場を作っていく活動になっていかないと思います。

2点目に、「学校農園の活動は、生きる世界のつかみ直しに繋がる実践である。全ての命っていうのは奥の方で繋がっている。このことの実感に繋がる実践である。」このことは、子どもたちの故郷伊那市の風土は、循環型農業、絶えることのない無限の世界、正に円相です、に真摯に取り組む人々の暮らすところであります。この風土を感得するために、地域の人々に学びつつ、いわゆる信州型コミュニティ・スクールの充実ですけれども、友と共に耕作し食する。このことによって故郷が見え、帰属意識が育まれるというふうに思います。

次に3点目ですけれども、「学校農園は、文字の教育と非文字の教育の組み合わせがうまくいくっていいですか、畑を耕しながら非文字の教育をやって、ある種のもの文字の教育で追加するといいますか、そういうことが可能になってくるんだろうという気がします。」というご指導をいただきました。このことは、食育の原点である「もったいない」「いただく」「感謝する」という言葉が先行してはいけません。農作業に専心する、そのことによって自ずと育まれることでありたい。そしてそこから芽生える教科、いわゆる科学の目を育むことでありたいというふうに思います。このことは、農業の生活化と学校農園展開年間構想の吟味と充実によるというふうに思います。

次に本年度、11月8日に『食の思想について』という演題でご指導いただきました。

そのひとつは、「日本のもともとの食事は、『魂=霊(み)』をいただくということであった。必要でない命は決して奪わない。」ということでありました。これは、生きているのではなく、生かされていることへの気づき。食材を無駄にしないところということだと思います。このことに子どもたちが気づいていくためには、耕し、種を蒔き、風雨病虫害を気遣い、成長の過程に常に心寄せる営みの中で育まれるというふうに思います。それは、丹念なる保存の記録の積み重ねが必要であると思います。

2点目に「自然の景色を見るときのように農業っていうのは初めて経験してもあまり緊張することはない。心地よいものが出てくる。親元から離れて実家に帰ったときのような。それは受け継がれてきた記憶、生命的世界の中で、受け継いできた記憶による。」というご指導をいただきました。このことは、疲れているところが癒される。

- ・植物とのつきあいにより五感が磨かれる。
- ・収穫の喜びが感得され充実感を味わう。

・作業を通して自ずから対話が生まれる。

ということから、不登校など生徒指導の課題に応える取り組みが期待できるというふうに思います。

3点目に「三澤勝衛は、子どもを外に連れ出して、周辺を歩き、農民から話を聞いたりしながら郷土を知る実践的な教育に徹した。郷土の人たちがどんな風土を作り、どんな気持ちを持ちながら生きているか。それが世界を観る力となっていく。」というご指導をいただきましたが、地域に、地域の人々に学びながらの「暮らしのなかの食」は、掛け替えの無い故郷を知りここに暮らす誇りを育む。そこで、今作成中の郷土学習読本「わたしたちのふるさと」の学びや、ICT教育による情報交換、50年の森林ビジョンなどと連動するなど、より総合的な取り組みになることが求められるということですが、50年の森林ビジョンについて言えば、例えば、ペレットストーブでできた灰を肥料に使うわけですが、このことに関連付けて、50年の森が学べるだろうし、かつては落ち葉を肥料にしたり、あるいは雑木林の雑木を野菜の支柱にしたりしたわけですが、そうしたことも50年の森林ビジョンになっていくというふうに思います。

次に今年度の実践事例に学ぶということで、特徴的なものを3つ上げましたが、ひとつは、伊那市の保育については非常に注目されているところですが、長谷保育園の実践「うれしいね！おいしいね！～五感で感じ、心が動いた経験から～」ということで、小学校や中学が正に学ばなければいけない実践というふうに思いましたが、中身については目を通していただきまして、下の「長谷保育園の実践からの学び」ですけれど、3点ありまして、そのひとつは、園児の興味・感心・気づきを活動の原点としていることです。ふたつは、子どもの活動の記録、子どもの事実です、に学んでいるということです。3つ目は、野菜に関する一貫した活動、地域や中学生との関わりを大切にしているということです。こういうところに軸足を置いているために、素晴らしい活動になっていると思います。

裏を見ていただいて、手良小学校の実践ですけれども、手良小学校では、「自己肯定感を高め、生きる力を育み、たくましくこれからの時代を生き抜く子どもに。そして、せっかく食育をするのだから、将来はこんな大人になってほしい。」というふうに明確に願いを持って、実践をしております。願いの具体は、そこに1番から8番までございます。手良小学校の実践からの学びですけれど、「暮らしのなかの食」の教育実践によって願う子どもの育ちを明確にし、この視点で実践を考察しています。そのことによって、教育実践としての深まりが期待できるというふうに思います。なお、教科横断的な学習への展開が課題としてあげられていますけれども、これは「暮らしのなかの食」を進めてくうえで常に問うていく重要課題であるというふうに思います。

次に伊那中学校の実践ですけれども、2番目のところに「実践を通して考えること」が3つありますけれど、そのひとつに、体験的な学習を重視していくとき「解けた」「できた」のような見え方はしてこない。微かな変化となって現れる。担任がここを「見る（観・看）」ことが重要だと指摘していますが、極めて重要な視点だと思います。次に、級活動・生徒会活動との関連が重要である、つまりイベント的にならないようにということを指摘していますが、これも大変大事であると思います。最後に、学校において子どもたちに生活を作ることが不可欠であると言っています。

ここから伊那中学校の実践からの学びを2点、「農業体験」による微かな変化を通して生徒観を育む。ふたつ目に、教科担任制によって分化されている学校生活に統合

された生活を育み、学校生活を豊かにすると共に、故郷への帰属意識を高める。このことがいえるのではないかと思います。こんなふうに伊那市の「暮らしのなかの食」をとらえてみましたので、ご議論いただければと思います。

白鳥市長

今まで取り組んできた「暮らしのなかの食」、教育現場においてどのようないい結果が出ているのか、また、これから出ていくのかと思うんですが、この「暮らしのなかの食」について、ご意見とか、質問等があればお出しいただければと思いますのでよろしくお願いします。

田畑教育委員

内山節先生に学ばせていただき、ある意味共同で現場を見させていただきながら続けてきて、改めて「暮らしのなかの食」を体験させていただいたんですけど、私自身も伊那小の総合学習がスタートした時に体制の中で育てていただいたので、畑仕事は本当に授業の一環で、当時もやっていましたし、自分の中でやる「暮らしのなかの食」のプログラムのイメージが、内山先生のお話をお聴きして、また、実際の学校現場で反映させていく中で、すごく変化した部分がありまして、とにかく農作業をするっていう教育プログラムで考えてしまうと、単純に作物を栽培するっていうイメージにとらえがちですし、この地域に転入された先生なんか、まず始めにそれが抵抗感として出てくるというのがあったりするんじゃないかと思うんですけど、正にここにも書いていただいているんですけど、食を核として伊那谷の暮らしの環境が、毎日の学校で実践して学べるというなかで、郷土への愛着とか帰属意識が育まれてくるころまで広がっていくと考えると、単なる食育というよりは生き方に直結したところにあるいろんな意味で広がっていく。ましてや、業として農業をやっているその存在に子どもたちが気づくということがありますし、また、この地域で支えられて自分たちが生きているということも意識として繋がっていく流れの中で、幼少期から中学校まで人生のキャリア教育の入り口として、いろんな意味で生き方であったりとか、この地域に生活している人とダイレクトに土を通じて繋がっていくということが、単なる農作物を作るという観点から大きく前進して、広い意味で子どもたちの学びが深くなるということ、教育委員会に入らせていただいて改めて感じさせていただきました。子どもたちに多岐にわたるいろんな気づきを届けてくれる実践で、いい結果が出ていると感じています。

白鳥市長

はい。ほかにどうでしょうか。

宮脇教育委員長職務代理者

まさにそのとおりなんですけど、始めた当初、校長先生に校長会とかでお話ししていると、どこかちょっと「まだ、そんなことやるの。」ということが感じられたんですけど、こうやって2年やってきて、校長先生方の中から「これはいいことだ。」というような意見がすごい聞かれるようになってきて、これは教育内容として非常に子どもたちにとっていいことなんだなということを感じようになってきました。学校の先生方がやってみて、「これはいいな。」ということを感じてくれていると思います。

白鳥市長

「いいな。」というところは、具体的には、生活の中に見えてくるとか何かあるのかね。

田畑教育委員

実際、現役の小生がうちにいるので、東小の3年生の事例なんですけれど、まあ、嬉しそうに作ったものをいただいでくるんですよね。しかも単純にそのものを持って帰ってくるんじゃなくて、実際、地元の北澤さんとか松本さんの、農業を指導してくれた北澤先生とか松本先生と子どもたちが呼んでいるんですけど、こんなことを教えてもらって、こんなふうにするとおいしいというところまで教えてもらって、「おかあさんといっしょに学校から教えてもらった作り方で作りたい。」と、クラスの中の授業の一環として終わるのではなくて、その日の食物に対する意識というのがものすごく変わったということを感じるといって、うちでも作ろう、自分のところでも作ってみたいというふうに変ってきていると思います。

北原教育長

ご家庭で実感していただいていることが一番だと思うんですけど、学校では収穫したものをまず自分たちで食べられる。または、給食の食材に提供して放送で「今日は何年何組のじゃがいもが給食に入っています。」とか、「きゅうりが」とか、「トマトが」とかいうことで、皆さんに提供できる、また、家庭に持ち帰るといって、目の前で収穫できる喜びがあると思うんですけど、もう一方では、例えば、高遠北小学校の「高遠そば」を一貫して作るという縦の繋がりであるとか、今年、長谷中学校の生徒はいろいろ作っているんです。その中に落花生を作って、是非保育園の子どもたちに収穫させたい、収穫したものを節分に施設のおじいちゃんやおばあちゃんと一緒に節分の豆まきをやりたいと発想が広がっていくんですね。それで、西箕輪の子たちは地域の皆さんと収穫したものを、漬物にしたりおやきにするということで発展する。今まで中でしか活動がなかったものが、校外であったりとか地域であったりとか広がりが自然と出てきているといったことが現れている。

白鳥市長

はい。

原田教育委員

私自身が食物に関連する仕事をしているんですが、体を強くするっていうところに関して、野菜っていうのがなかなか今摂れないという現実があるんですが、腸は第2の脳と言われているらしくて、同じ土の中でできたものをみんなで食べるというのが、菌の共有というのがあるらしくて、同じものを食べるというだけで、生きた菌を取り易いということがあるらしいんです。そうなんです。免疫も腸で作られると思うんですけど、そうした体の構造のうえでも、哲学的なことだけでなく、地産地消のものを食べると良いということが分かってきているようです。そういったこともやっていたものですから、この取り組みがどうやって発展していくのかっていうときに、例えば、子どもたちが作ったものを家に持ち帰って食べると、親御さんたちも共有できるわけですので、それも意志の疎通がしやすくなる。そういったこともあるのかなというふ

うに思っています。

白鳥市長

はい。

松田教育委員長

教育長さんに付け足しなんですけれども、うちの孫が長谷保育園に行っているんですけれども、ハンカチに大事に包んで中学生と収穫した落花生を持ってきて、「今日、お兄ちゃんたちとこれを食べた。」というんです。この何とも言えない中学生とのつながり、これひとつを見ても、この活動の意味の深さが表れていると思うんですね。まだ、4歳の小さい彼女だけれど、おそらくその記憶はずっと心の中に残って、故郷に生きていくときのひとつの視点になると思います。教育長さん言われたように学校の中だけでやっていく活動から、自然とほかのところを開かれ広がっていく、そういう活動になってきていると思います。

白鳥市長

「暮らしのなかの食」も2年目、3年目に入るわけですが、試行期間がありましたので、そうしたことでいろんな深化をしながら所期の目的に向かって伸びていっているなあというそんな感じでしょうかね。来年度予算の中にも盛ってありますので、各学校でしっかり使ってもらって足りなければ、こんなところにこうしたいのでということを書いてもらえればと思います。

田畑教育委員

個人的な意見なんですけれども、内山先生の話ってものすごくって、去年の講演の②の「生きる世界のつかみ直しに繋がる実践。すべての命っていうのは奥の方で繋がっている。」っていうの、命を人に置き換えると、地域に住んでいる自分の足元は何なんだっていうところを考えていけるんです。先に進んでいくと、結局、受け継がれた記憶を食を使って云々という話になると、実は、そこで地域の祭りみたいなものとも発想がつながっていくし、最終的に郷土の人たちがどんな風土づくりを目指し、どんな気持ちで生きてきて、やがて自分はここで生まれ、どんな役割を果たしていくかということも、食に全てつながっていくというのも、内山先生の考え方で、実は教育委員会だけで勉強しているということが、すごくもったいなくて、親、特に食材を扱う母親に聞いてもらったら、すごい響く人には響くんじゃないかと思っていまして、予算がかかってしまうとあれなんですけれども、もっと大きいキャパシティでメインを内山先生の講演会として企画できたら、親の食に対する意識が変わるんじゃないかと思っています。

白鳥市長

時間もテーマごとに替えていかなければいけません、これを最後にします。

松田教育委員長

伊那市は不登校という大きな課題を抱えています。心に悩みがある、そういうところで、活動しているところを見ると農業と畜産、そういうところで蘇ってきている。不登校の子どもも例えば修学旅行の時は出てくる。遠足の時は出てくる。そういうこ

とを考えた時に、「暮らしのなかの食」の時間の時に、最初からは難しいと思うんですけど、収穫したものを持って行って「今度、一緒に来ないか。」と活動とともに呼びかけていく働きかけによって、ひとりでも二人でも回復してくれば良いというのがひとつです。2つ目は、「暮らしのなかの食」があり、ICTがあり、50年の森林があるというふうにする、多忙感が先生方に出てくるので、内山先生の教えのように、「暮らしのなかの食」の中に50年の森林ビジョンだったりICTも入ってくるし、それから、こんなに立派な「わたしたちのふるさと」という本を、「暮らしのなかの食」に取り込むことによって、大きな流れの中に、様々なものが入ってくるというふうにする、先生方の負担感も減ってくるので、そういう構想を大事にしていかなければいけないと思います。何本も柱があるというのでは混乱してしまう。

白鳥市長

では、最初のテーマはこのくらいにして、次にキャリア教育に行きますので、お願いします。

(2) キャリア教育の推進について

平成28年11月22日伊那中学校を会場に行われた「キャリアフェス in 伊那中」の記録DVDを鑑賞

田畑教育委員

いろいろな形で関わらせていただきました。報告書をまとめていただいておりますので、細かくはご覧いただきたいと思いますが、私の方からポイントを絞ってお話しさせていただきます。

今回、広域の郷土愛プロジェクトというプロジェクトの中で、伊那中学校でひとつのモデル校を作ろうということで武田校長先生の、新しい形のキャリア教育に取り組みたいとのご要望の中で、キャリアフェスが実現いたしました。立ち上げの段階で、新しい取り組みがありまして、まず、実行委員会の中に生徒の代表を入れまして、生徒の意見もダイレクトに会議の中で出していただきながら、子どもたち主導ということを進めました。

また、本来は上伊那地域でということで、募集としてはこちらから一本釣りで企業さんに声かけをしましたが、武田校長先生の意向がありまして、できれば伊那中の通学区の事業所を多く入れ込んでもらえればというお話もありまして、地元商店街からも石川さんに出ていただいたりということがありました。

あと、新しい取り組みとしては、実は、仕事だけでなく、自分たちが育まれたこの地域の文化にも重点を置きたいということで、先程の活動で出てきましたが、ビジネスブースとヒューマンブース、地域の人を知ろうということで、地域のいろんなところで活躍されている、先程見ていただきましたが、地域で活動されている多種多様な人たちに出ていただいたということで、その3点が今までにない新しいモデルということで、発表させていただいたものです。

それで、感想は見ていただくといろんなことがあるんですが、関わってみて、特徴的だなと思うのは、やった大人も書いていますが、子どもたちの中から、「こんなに大人がエネルギーを持って楽しく関わってくると思わなかった。」という感想、また、大人の方からは、気づいていない方の感想かもしれませんが、「子どもたちのテ

ンションが割と低くて、私たちのテンションに子どもが乗ってきた。」みたいな感想を書いてきた人がいるんですけど、その方からすると、子どもたちはもっとテンションを上げた方がいいんじゃないのということを書いてくれたかもしれませんが、キャリア教育に長く携わらせていただいた私からすると、まずは大人のテンションで子どもはほだされるというのが、この社会の中では無さすぎるので、そういう意味では子どもたちに大人の熱意が伝わり火がついていくというのが、先程の食育の部分でも出てきましたが、郷土の人たちがその風土で育ち、そこに根ざしてきたかを伝播させるのが、職業紹介だけでなく、ヒューマンブースという切り口の、この地域を支えている文化活動のようなものを同時にキャリア教育の中に取り込んでいくというのが、今回のモデルの非常に大きい成果であったなあというふうに思います。規模的なものであったり諸問題はあったと思いますが、ひとつのモデルとしては非常に成果があったと思っています。

白鳥市長

はい、伊那中から始めていって、今年は上伊那では駒ヶ根東中で計画がされ、上伊那全域で行いましょうということなんですが、伊那市としては中学生が3年間のうちに必ず1回はできるようにしたいということで、伊那市版の「キャリアフェス」ということで春富中学校で行う。春富に関しては、高遠中学と長谷中学も一緒にやってもらうというふうに思っています。来年度については東部中、その次は、伊那中と西箕輪中一緒にしてというふうに、3年間のうちには必ず体験してもらえるような形で持ちたいなあと思いますので、また、やり方については、今回のものを参考にしながら、発展形をお願いできればと思います。キャリアフェスティバルについては、見ても本当に楽しそうですよね。また、いろんな職業の人が、お手伝いしたいという話があって、例えば、弁護士の先生だとか、「いくらでも声をかけてくれれば行きますよ。」と声をかけてくれる人もいるし、多種多様な職業があるということ子どもたちにも知ってもらわなければいけないし、その辺も遠慮なく言っていただければ更に広がりが出るかなあと思います。ほかにどうでしょうか、ご意見を。

北原教育長

今の来年度の話ですけれど、春富中と郷土愛さんと企業で進めていて、単独で伊那中以上の生徒がいる中で、保護者の皆さんに関わっていただくということで、ブースがいっぱいという状況です。今の3年に一遍というのが大事ですので、高遠・長谷一緒にとということもあるかもしれませんが、1年にふたつということも協議をしてもらいます。

白鳥市長

そうですね。参加していただく皆さんも、ボランティアで会社を休んでという方もいるので、経営者協会を通じて要請したり、いろいろな組合を通じて要請したり、商工会議所を通じてお願いするということもやっていかなければいけないと思いますので、次はそこら辺をよく練ってやってください。では、次に行きます。

(3) 「中村家住宅」整備・活用による高遠町の地域振興について

資料NO. 3に基づき、小松生涯学習課長説明

白鳥市長

この中村家ですけれど、江戸中期の町屋ということで、非常に文化財としての価値も高いという専門家の意見もいただいております、これは国の制度を上手に使うって改修し、また、地域おこしにつなげようということで、始まっております。国の制度上、単年度で完成させなくてはならないという非常に忙しいことで、そのためには走りながら考えていかなければいけないところもありますので、そこら辺、何年かかけてじっくり考えて次はということではないということをお承知しておいていただきたいと思っております。今、案としてあるものがこのままいくわけではなくて、こんな形というイメージで作っておりますので、特に活用という部分では、江戸時代参勤交代のメニューが出てきたので、参勤交代の当時の食べ物を提供したらどうかとか、また、そばでも究極の高遠そばを出したらどうかとか、いくつかそうした案がありますので、そんなことで風情を残しながら活用ということで行きたいと思っております。何かご意見があればお願いいたします。

松田教育委員長

教育委員会の立場からですけれど、1 ページの2 (2) に「建物は、できるだけ文化財的価値を損なうことのないよう補強改修を行う。」ということで、このことを是非大事にさせていただいて、文化財としての価値を残していただきたいというのがひとつです。

ふたつ目は、「江戸町屋の活用による城下町活用事業」というのが、絵でできていて良くできていますけれど、更に入れていただきたいのが、高遠藩主の菩提寺であった満光寺さんであるとか、高遠町で最も古い真言宗の香福寺であるとか、そういうものを入れていただきながら、是非物語を作ってもらいたいなあとというふうに思います。ただ、中村家を点として置くのではなくて、中村家もあるし、ほかのところにもつながるといような形で、1 番の歴史から5 番の高遠満喫を更に物語的にしていただくといいかないというふうに思います。

白鳥市長

はい、ではそうしたことも参考に考えていくということで、ほかはどうでしょうか。

宮脇教育委員長職務代理者

はい、江戸町屋の下の方で、看板を付けるということで、この看板は「日本で最も美しい村」の統一の規格だと思うんですけど、せっかく高遠が「日本で最も美しい村」になったので、写真を撮る人がたくさん来るんですよ。それで、写真を撮る時に、結構邪魔になるものがいろいろあって、例えば、満光寺さんの小楼門の写真を撮ろうと思うと、家に引く電線が2 本入ってくるんですよ。どうしてもそれがあると、写真を撮ってもあまり良くないという、ちょっとしたことがあるので、今の時代、いろいろ発信するのに写真を付けて発信するので、そういう時にきれいな景色が映っていた方が絶対口コミで拡散するので、例えば、捧館長さんのように映像を監修している方に監修してもらって、ちょっとしたことで良くなることはいっぱいあるので、そういうことに気をつけて進めると、発信力が出るかなという気がします。

白鳥市長

実は、この看板は、三風モデルって言って、上伊那全体で看板を統一していこうと、色とか、フォント、また、大きさ、長野県経営者協会南信支部の皆さんと行政8市町村がその方向で動いているんですよ。農道にある看板からやっっていこうということで、それに相呼応するように、駒ヶ根の菅の台、あそこが看板だらけだったものを、三風モデルに替えちゃった。高遠も藤沢川沿いにある看板、塩供だとか荒町を来年度替えようと、その中にこの街中の看板もさりげなく、分かりやすく、置いていきましょうというその看板です。もちろん、美しい村連合の畑と田んぼの形をしたものも設置はするんですけど、ここにある看板はそうした統一性のあるものにしようということです。

宮脇教育委員長職務代理者

その方がいいかもしれないですね。

白鳥市長

ことさらでかい看板が必要ないということもあるんですよ。

北原教育長

今、看板の話も出ましたが、3ページの全体の体験事業ですけど、現在、国立高遠青少年自然の家に来る県内外の中高校生、中学生が主体で多いんですけど、修学旅行や体験ツアーで街中を歩くツアーがたくさんあるんですけど、考えてみると一般の方が歩いている姿は少ないんですね。そうすると、この看板であったり、案内板であったりということで、統合的にこの町全体を見る、ここは町中ですが、東の方へ行けばお城から来られますし、そういうふうに来て歩きたいなという枠にして、そこに食もあるしということを大事にしていければいいなと思います。

白鳥市長

はい、ほかにご意見があればどうぞ。

全委員（なし）

白鳥市長

ほかにもこんなことがあればということはまた、後で出していただければと思います。

（４）古い地名調査の今後の活用について

資料NO. 4に基づき、小松生涯学習課長説明

白鳥市長

大変な作業の中で素晴らしい果実ができたという思いで、私も何人かから言われたんですが、「もう10年早ければ知っている人がいたのになあ。」と言われました。10年遅かったにしても、こうしたものができたということで、大事なことだと思いますので、今、これ、6冊あるの。

小松生涯学習課長

ええ、そうですね。

白鳥市長

これに、高遠・長谷のものができてくるの。

小松生涯学習課長

はい、今年29年度でまとめていきたいと思っています。

白鳥市長

はい、これの今後の使い方をどうしていくのかということが非常に大事なところなので、完成して本棚に置いておくということだけでなく、活用していかないと思いますし、地区によってはさらに郷土史を作るといふようなところもあるんだね。

小松生涯学習課長

そういう話も聞いています。これがきっかけになって取り組んでいるところや前から取り組んでいるところもあります。

白鳥市長

この古い地名調査について、ご意見があればお願いします。

松田教育委員長

活用のところで、小中学校の総合学習教材として利用とありますが、総合学習に限定しないで、社会科の学習にもどんどん活用できると思うんですが、いずれにしても実践していないので、卓越した先生にでも事例を作っていただいて、その事例をもとにして実践事例をどこかで実践してみるということがないと、なかなかどういふふうに使っていいのか先生方に分からないので、それをやってもらいたいのがひとつと、公民館では是非館長さんをお願いして、講座を1コマ作ってもらったらどうですかね。人数の多少にかかわらず、地名調査の講座があるということが大事なことなので、9館もあるので、1館に1講座ずつあればかなりしっかりしてくると思います。そういう活動がないと、本棚に置くようになってしまう。

白鳥市長

公民館活動の中で、勉強会とか考えてみた方がいいかもしれないね。

小松生涯学習課長

そうですね。西春近ではもう始めていただいていますし、段々と始めていただいています。

白鳥市長

やっていく中では、修正箇所が出るかも知れないし、そうしたことを含めながら、段々精度の高いものをやっていけばいいと思いますので、これについては段々と議論してもらって、利用できるようにしていってもらいたいと思います。

北原教育長

今あったように、西春近の公民館では、3回に分けて学習会をやったようなんですけど、そこからさらに発展して、地区分館では古い写真の紹介に発展していったということで、前から、市長はアーカイブのことを言われていたんですけど、せっかくこの素晴らしい組織ができていますので、これを学習していると、自然と「うちにあるぞ。」という話になっていくかと思うので、公民館ではこれを大事に発展させていけたらいいなと思います。

白鳥市長

そうですね。今、アーカイブという話が出たんですけども、高遠を中心に矢澤さんをお願いして、もう3年目、完成したんだよね。

捧文化振興課長

データはほぼ完成しているんです。ただ、データベースになっていないので、紐づけ、ナンバリングして、何年のどこというところまではできています。

白鳥市長

まほらいな市民大学で勉強した皆さんがいるので、今度、伊那地区の古い写真とか、それを高遠の歴史博物館を使って、取り込んでいこうという作業に、来年度入りますので、新しいものが出てくる。各地域で写真というものは、古いものはあまりないんですね。結婚式の写真とか、戦争に行く前の写真とか、そういうものぐらいで、日常的生活を、大正時代とか昭和初期に撮っているというものはなかなかないので、写真館とか、あるいは国土交通省、旧建設省とか、森林管理署とか、ああいうところに行くと結構あるんですね。そういうようなところを訪ね歩いたりして、引っ張り出しそれをデジタル化していくという形で、また、数年かかると思うんだけど、広くやっていってもらいたいと思います。

松田教育委員長

だいぶ前ですけど、岩波から写真集が出たんですね。かなり古い写真集が出ていて、かなりの冊数になっていまして、その中に例えば農村文化とかがありますので、そうしたものを活用していけばいいと思います。

白鳥市長

それに合わせて、向山雅重先生の野帳がありますよね、写真もいっぱいあるので、そうしたものも取り込んでいったらどうかと思うんですね。向山雅重先生のところの調査研究は数年前に止まったままになっているんですね。もう一度復活させてやっていかなければいけないかなと思うので、担当の課長はどうか。

捧文化振興課長

はい、図書館にある資料は見られるようにいたしまして、この時代のこういうものというと出てくるように見ることができるようになっています。それは写真ですので、元データは宮田村にあります。連携して、元データ、フィルムからちゃんとした形でやっていくとか、展示もやっていきたいと考えています。

白鳥市長

貴重だもんね。活用については、前向きにやっていただくということと、デジタル化、アーカイブについても進めるということをお願いしたいと思います。

(5) 伊那市史改訂版の編纂について

資料NO. 5に基づき、小松生涯学習課長説明

白鳥市長

この話というのは、前々から気になっていて、合併後新しくこの市史を作るとかいうことをどこかでやっていかななくてはいけないと、編集中の副読本「わたしたちのふるさと」で先生方も積極的に関わっていただいて、いろいろな分野の先生たちもある程度見えてきたかなという気がしました。と、同時に古い地名調査をすることで、専門的に勉強する人も何人か見えてきたので、学校の先生とか、あるいは大学の先生、いろいろな皆さん、これから掘り起こしをして、おそらく5年や10年すぐかかってしまうと思うので、まずスタートを切っていかなければいけないかなあと思って、提案させていただきましたので、これに対してご意見をいただきたいと思います。

松田教育委員長

今、言われました「わたしたちのふるさと」、この場でも最初検討してもらったんですけれど、中身がすごく良くなってきているんです。やはり、ここに参画してくださっている先生にも、このことを投げかけて、そして、一番下に書いてあるように、若い世代を育て研究人材の育成を図る、そうしたところに力を入れていけばいいなと思います。

白鳥市長

ほかにどうでしょう。

宮脇教育委員長職務代理者

実は私まだ読んだことがないので、申し訳ないんですけれど、いろいろそうしたものが揃っているということが後々大事なことなんだろうということは分かるんですね。ただ、なかなか読む機会のない人にも、読めるような、例えばデジタル的に読めるということも考えつつ、新しい時代も考えた種子ができたらいいかなという気がします。

白鳥市長

こう見ていくと、面白い。

宮脇教育委員長職務代理者

そうですね、多分見れば面白いと思うんですよ。

松田教育委員長

上伊那郡史の歴史編って、天正10年高遠城の織田軍との戦なんて、ものすごく面白い。夢中になって読んでしまう。

白鳥市長

ほかはどうですか。

北原教育長

関わっていただく方について、今回の「わたしたちのふるさと」の皆さんもそうですけれど、異動で長く関わるということが難しくなる可能性もありますので、若い人のなかで関わるということはいいんですが、ちょうど退職してしばらくしたの方が、今回地名調査に関わっていただいた非常に造詣の深い方もいますし、今回、社会教育委員会などもやってみますと、深くやっているなあという感じの方がいますので、長い年月かけていく方もしっかりと据えていくことができればなあと思います。

白鳥市長

担当の方でもしっかり研究して、やっていくという方向で準備を始めてもらうということをお願いしたいと思います。どこかでまた、スタートを切らないといけないと思うので。これをまとめていくというのは、すごい仕事だよな。

北原教育長

かなり難しいと思うんですよ。ですから、学芸員さん達は、専門ですからあとは。

捧文化振興課長

創造館と歴史博物館の学芸員が中心になってと書いてありますけれど、今の人員ではとてもできないので、事業の開始にあたっては新たに本当にそれができる人が必要だと思います。

白鳥市長

それはそうだ。専門にあたる人が複数いないと。

松田教育委員長

伊那市が大伊那市になったので、伊那市として1冊にすることができるかどうか、例えば「伊那市史」としておいて、「高遠町編」とか、「長谷編」とかにしていかなないと、あまり広がり過ぎて、中身が薄くなるという可能性もあるし、その辺のところはもう少し慎重に考えて出発した方がいいんじゃないかと思います。

白鳥市長

かつて上伊那郡史が伊那市史になった時に、昭和30年の合併の後に、その時どういう機運でできたのか、その辺をよく検証して、どういう形がよいのかをこれから検証して、何十年に一遍は作り変えていくという大変な作業があると思うんです。平成9年の長谷が一番新しいんですね。

小松生涯学習課長

そうですね。

白鳥市長

それから20年、いちばん古いものでは40年になるからね。では、方向としては、作り替えるということで、ご理解いただいて、作りますということではないんですが、

やり方とか時期とか、先生とか、編集する皆さん、予算のこともありますし、考えつつ行きたいと思います。

最初、時間がないと思っていたら、逆に余ってしまったんですが、ここにある議題以外のことも結構ですし、ここについてはもっと話したかったということがあれば、全体を通してお願いしたいと思います。

松田教育委員長

キャリア教育の件ですけれど、丁寧に感想を拾ってもらって、全部読ませてもらったんですが、素晴らしい感想がたくさん出てきているんです。ただ、残念なことに後ろに考察がないんだ。このたくさんある感想の中からどういうことが見えてきて、その見えてきたことを元にして次の春富中ではどういうふうにしていくか、そういうことができていくということが欠かせないと思うんです。だからせつかく拾ったこの感想を活かすような手立てを是非やってもらいたいなあと思いました。それで子どもたちも勉強しているけれど、実際には企業の人たちがこのことを通して元気になっているね。よく言うじゃないですか、教える子どもに逆に教えられると、そういうことをこの感想を読んで改めて思いました。

田畑教育委員

今のお話の中で、考察ということが大事だということと、企業が学ぶということに関して細かいことなんですけど、普通こういうことをやると、来てくれた企業の人に恥をかかせちゃいけないということで、生徒を割り当てるとというのが学校の配慮としての流れなんですけれど、今回、武田校長先生と話をして、「それをやめましょう。」と、企業側の反省で「もうちょっと工夫をすればよかった。」というのがいくつか出ているのは、生徒がゼロとか、1人とか2人しか来なかったところがあるんです。今までの教育に携わって「行ってやっている。」というスタンスだと「失礼だ。行ったのに生徒が来なかったじゃないか。」という人たちがいたことが過去にあったんですけど、今回実行委員会の説明会に来ていただいて、「来なかったら自己責任です。そもそも歩いている中学生に自分の魅力をアピールして子どもをいっぱい集めるということが自分たちの責任です。」という切り口でお話ししてあったので、感想の中に自分の反省みたいなことを書いているのもそうしたことがありまして、非常にお互いの学びになっている。伝えることの難しさを企業側も初めて勉強させてもらったと思います。

白鳥市長

こういうのっていうのは、ほかでどこかやっているところはあるの。

田畑教育委員

この切り口はないと思います。初めてだと思います。

白鳥市長

いや、面白い取り組みだと思うんだよ。

田畑教育委員

単純な子どものハローワークとか職業紹介は日本全国みんなやっているんですが、

ちょっと切り口がそういうものとは一線を画している感じがします。

白鳥市長

さっきのビデオを見ても子どもたちが楽しそうだもんね。

宮脇教育委員長職務代理者

楽しかった思い出は絶対大事だと思って、楽しい思い出のないところには帰ってきません。楽しかったなあと思えば、大人になった時に選択肢のひとつに入ってくるので、こういう取り組みは絶対大事だと思います。

田畑教育委員

この後のキャリア教育の授業に入らせてもらった時に必ず言うようにしているのは、「伊那市に企業や働く事業所は何か所あるか知っている？どのくらいの人が働いているか知っている？」っていう投げかけをしているんですね。伊那市の統計資料に出ていて、平成26年の段階で、3,400から3,500事業所があって、人口の約半分弱の37,000人が就労していると数字が出ていて、例えば、20人の企業で働いている時にお話しさせてもらう時には、「今日お話しさせてもらうのは、37,000分の20だから、キャリア教育で職場体験に行ったら、職業の体験も大事だけれど、今日試しに話を聞いた人以上にどれだけの大人と関わって話ができるかという、働いている人一人ひとりに話しかけてどんな思いでいるのかということを知るのが授業だ。」とそんな切り口に変えてみえています。子どもたちもどちらかということ、キャリアで職場を探すときに自分の働きたい職場に行くという意向だと、そこからはずれるとモチベーションが下がってしまうということがあって、そうじゃなくて、そこに働いている大人とコミュニケーションを取ることから始まるという切り口が伊那では始まっていると、このキャリアフェスは大きなインパクトになると思います。

白鳥市長

僕なんかからすると、こっちへ帰ってきて、当然南箕輪でも駒ヶ根でも通えるので、上伊那全体が経済活動の場として、就職の対象になるというふうに見てもらくと、更に3,000が5,000になったりすると思うんですね。まず知らないんですね、会社や歴史をね、教えてこなかった、伝えてこなかったんですね。これをキャリアフェスを通じたり、これからのキャリア教育の中でも伝えていくということをしていけば、何でも都会にいるという選択にはつながらないと思うんだよね。

宮脇教育委員長職務代理者

うちの場合、東京で就職しちゃいましたけど、そういうことも大事な選択肢としてね。

原田教育委員

多分帰ってくると思います。

白鳥市長

言わないと帰ってこないよね。どうでもいいようなことを言っていると帰ってこない。帰ってこいって言わないと帰ってこない。キャリアフェス以外でもほかにどうで

しょうか。

白鳥市長

「暮らしのなかの食」で今年も内山先生は来るんですか。

北野学校教育課長

お願いしていきます。

松田教育委員長

最初にお話しした時に、3年間は来ていただくというようにお願いしてありますので、来年も来ていただけたらと思いますが、まあ、あの先生は手放さない方がいいと思います。例えば、伊那小の教育が固まるのに、三枝孝之先生に10年おいでいただいて、基盤がカチッと決まったので今日があると思うんですが、5年、10年と来ていただければ、ありがたいと思いますね。

白鳥市長

手弁当みたいなもんだね。

北野学校教育課長

そうですね。10万円をお願いしています。必ず2回来てもらっていますね。

田畑教育委員

お父さん、お母さんにという切り口でやってもらったらものすごくいいと思うんですが、君たちはという切り口でも、どうでしょう。

松田教育委員長

いいね。もったいない。

田畑教育委員

中学生や高校生に、君たちはという切り口でやってもらったらものすごい気持ちの変化が起きるような気がするんです。

白鳥市長

じゃあ、そこら辺も考えてもらって、活かしてください。ほかにはありませんか。

全委員（なし）

白鳥市長

それではこれで総合教育会議を終了させていただきますが、事務局の方から何かあればお願いします。

大住教育次長

特にありません。

大住教育次長

本年度終了ということですが、このあと懇親会を持ちますので、その場でもご意見を交わしていただければと思います。以上を持ちまして伊那市総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。